

其の頃の三浦新七博士と私

田 崎 仁 義

一
吾等の母校の先輩諸先生にも随分碩學が少くなかつた。關・

佐野・福田の三博士を始め、村瀬・下野・石川・上田・三浦等明治から大正昭和にかけての吾が學界に各其専門學を以て大なる貢獻をされた人々の輩出されたことは吾等の喋々を待たずして知られて居る所であり、吾等當時の一橋校出身者は皆な深厚な其の學徳師恩に浴したもので、其の點敢へて甲乙ある筈はないが、中にも最も私が深く大なる影響を享受したのは關・佐野・福田及び三浦の四博士である。此の四博士の中、佐野善作先生は尙ほ鑿鑿として御壽康を保たせられるので、眞に喜ばしいことであり、彌々御壽康御清福であらせられるやうに祈つて已まぬところであるが、他の三博士は皆な御長壽と申す程でない御年で既に逝去せられてしまつたことは深く悼惜の情に堪へ

其の頃の三浦新七博士と私

ないところである。而して關・福田兩博士に對しては各其のゼミナール門下生其の他によりて追悼又は記念事業が企てられ、私なども其の末員に加はつて微誠を致して來て居るのであるが、三浦博士に對しては未だ其の企の發表を承つて居ない。もつとも丁度終戦後時世大變の最中に逝去せられた爲でもあり、何れ其の中に必ず相當の企があることであらう。其の際は私は私の一分として盡し得ると思つて居るのであるが、私も既に今年七十歳にもなり、自分丈は尙ほ元氣のつもりであるが、此の先何年生存し得るかわからぬので、今の中に同博士についての思出のやうなものを書て置きたいと思ふ。

二

吾等が一橋校に入つた明治三十三四年頃は三浦博士は專攻部卒業間もない新進助教で商業通論を豫科に講じて居られたと

ころの隆鼻秀目、舉措典雅な貴公子であつた。學生時代は見晴しよい駿河臺の下宿屋から上野忍はず池を一週して來るのを毎朝の日課として清爽な気分と健康な體軀とを養成し、最も合理的なる勉強をせられたと云ふことであり、擔當の講義は條理頗る整然たるものなると同時に、規模宏大にして而も深みのあるものであつたと記憶して居る。間もなく文部省より獨逸留學を命ぜられ、吾々は滿一年とは其の講義を聞くを得ず、商業通論の著書〔「商業經濟學」〕と云つたと思ふが、自分の所蔵して居たのは戦災に焼けて確かめ得ない。一冊を置土産として渡獨せられた。明治三十六年のことであつたと思ふ。此の著書は三浦さんの當時企圖せられて居つた八九冊程で完成すると云ふ大きな規模の商業學の第一冊に當るものであると稱せられたもので、學生間からは勿論、斯學界からも大に其の完成を期待せられて居たものであつた。此の當時の文部省外國留學は三年の期間を以て普通としたが、三浦さんは期間後は自費留學の手續をせられたらしく、四年たつても五年たつても歸られず、とうとう十年と云ふ長年月滯獨して研究に没頭せられ、たしか明治四十五年の春に歸朝せられたやうであつた。而も此の十年間殆んど獨逸で過されたことであつた。

私は明治四十年に專攻部を卒業し、次いで一年志願兵を了ると四十二年頃から母校の講師となり、關博士の助手の様な事をして居たが、健康を害し、四十五年六月頃から休養を願つて鎌倉龜ヶ谷の大藏寺に寓居し、日々由井濱に散歩したりして養生をして居たが、或る日散歩中突然瀆で留學新歸朝の三浦さんに出會つた。是れが機縁となつて、お訪ねしたり、來訪して下さつたりして居る間に、其の氣高き人柄と、其の造詣蘊蓄の深遠なのに段々と引き付けられて行つた。

三

暑中休暇後三浦教授擔當の講義は「經濟史」と云ふ名目であつたと思ふが、其の内容は、文化史的な社會史と云ふ様なものであつた。私は同教授に請うて特に聽講を認諾して貰つた。講堂は前に商品陳列所に使はれて居た合併教場で、學生間に於ける講義の人氣も頗ぶる盛であつた。此の頃の經濟史は福田博士が祖述せられたビュヒヤーの産業發展史等に見るやうに、世界の原始的諸民族に於ける社會經濟的狀態の比較研究などを基礎として、發生學的發展史的に論及する傾向が頗る濃厚となつて來て居たのであるが、三浦教授の此の時の講義は更にラムブレ

ヒトなどの文化史的見方を加へられたのは元よりのこと、其の資料を Social Anthropology や Ethnology の方面、更に又た神話、傳説、制度、慣習共に考古學等の諸方面に聯關する所謂 Folk-Lore の極めて廣汎な範圍に互るもので、實は、本一の時に福田博士のビュヒャーの Industrial Evolution の祖述に一度驚嘆した私は茲にまた三浦教授の此の講義の清新潑刺なるに二度喫驚したのである。特に私の驚いたことは、三浦教授が講義中に屢々尙書、詩經、春秋、禮記、儀禮及び周禮の如き東洋古典を引用せられることであつた。元來私は少年の頃から漢籍に聊かの親しみをもつて居た者であり、本二の頃から五經に讀み入り、また劍道師籙山田次郎吉先生から山鹿素行の學問に導かれ、政教要録、玄原發機、山鹿語類などを同先生から借覽し、特に其の山鹿語類によりて、所謂、吾國古學派の學問體系と主張とを知り、因つて尙書、詩經、三禮などの社會史または文化史、從てまた經濟史及び同思想史などの上から重要視すべきものではないかとの感を深くして居り、專攻部在學中は淺草の海禪寺に寓居して居つたが、同寺は人の知る如く臨濟宗の名刹で、先住職には敬冲和尚の如き善知識があり、佛書の外、漢籍の藏書が非常に多かつたのであるが、私は寄寓中、當時の

其の頃の三浦新七博士と私

住職中原秀嶽和尚の認諾を得て、其の藏書を自由に借覽したりして、益々興味を感じて居たので、一橋會雜誌に「爾雅」や「説文」のことを書くやら、國民經濟雜誌に「禹貢」のことや「山鹿素行の民政論」などを書いたりして友輩や先覺諸先生などから「今時そんな虫喰本を讀んでどうするのか」と冷評せられたりしたものであるが、然しながら私には其の虫喰本が放棄し兼ねられた。其の頃瀧本誠一氏（後の法學博士）が廿餘年間苦心蒐集せられたる維新以前の吾國諸學者の經濟關係の文獻が漸く一部學界先覺者の注意をひき、同氏と福田博士、内田銀藏博士、河上肇氏等との交通が行はれて居り後に日本經濟叢書の發行となるに至つたのであるが、福田博士や河上氏は先づ三浦梅園の「價原」の經濟學說史上の價値を認め、之を學界に紹介せられるやら、或ひは新たに活字印刷に付して同好者に分たれると云ふ様な風潮も一方には見えて來た時であり、福田博士の如きは、私の虫喰本讀みを必ずしも叱笑せられずに、時には獎勵の言葉をかけて元氣付けて下さつたので、空谷の響音と云ふか、知己の恩と云ふやうなものを感じて居たが、それにしては只だ大局から中國古代の經濟思想又は學說の研究は無視すべきものでないと云ふ觀點からのごとく、其の頃私の考へたり、

書いたりに居たものゝ内容などに就ては別に斥けも贊しもせらるゝ譯ではないので、相當に自信をもちながらも時々には日暮れて曠野にさまよう様な淋しさを感じることもあつたのであるが、十年も獨逸で學んで來られた三浦教授が、世界最新學界の到達點とも云ふ可き方面から、所謂虫喰本の一種たる經書の價值を認めて時々其の片鱗を閃かされるのを見て、自分は非常な感動と欣快を覺えずには居られなかつた。今からは四十餘年も過去のことであり、當時の筆記なども遺つてないから、其の講義の要項を詳しく記すことも出來ず、また茲には其の必要を感じる譯でもないが、其の重點の一つとして、人類の社會生活や經濟生活の發足點と云ふか、原始形態と云ふ様なものを明かにすることに力を入られた。其の説明に Morgan の Ancient Society などの書名を擧げられて引用せられたかどうであつたか今ははつきり記憶して居ないが、とにかく同書の冒頭に説いて居る様な事の講義もあつたと同時に Men's house のこと、Totemism のこと、Taboo のこと、又婚姻制のことなどに就ても詳細に講義せられた。此れ等のことは皆な吾等をして極めて清新な興味を感ぜしめた。而して僅か半年にも足らなかつた私の此の講義の聽講は私の後の學問生活に深く且つ大なる

影響を及ぼしたことを自ら認めざるを得ぬものがあつたのである。

四

私は一日、三浦教授を其のお宅に訪問し、種々其の講義に關聯して教導を乞うた。駿河臺の水道橋寄の邸の見晴しのよい座敷であつたと思ふ。其の時 Men's-house に關しては Hutton Webster: Primitive Secret Society, New York 1906 や Totemism に就ては J. G. Frazer, Totemism and Exogamy, 4 volumes, London, 1910 を讀む様に勧められ、且つ Primitive Secret Society の方は暫時貸して下さつた。私は拜借の同書を讀みながら兩書共丸善に依頼して取寄せてもらひ、興味深く讀んだのみならず、前者は其の譯述を志し、大正四年十一月、實業の世界社から「原始的民族の秘密講」と云ふ書名で出版したのであつた。此の書は三百五十頁ばかりのものに過ぎなかつたけれども、私の處女出版で、自分としては忘れ難い親みを感じ、且つ其の譯述作業を通して原始的諸民族の生活に關し、從來全く聞いたことも無かつた珍らしく興味ある幾多の事實を知ることを得て、愉快であつたのみならず、私が讀んで來

た所謂虫喰本の中にあるところの中國古代の傳説や、古き風俗習慣又は東洋諸地方の民俗の中に其れに對比照應する事柄が少なからず見出し得ることを知り得て欣喜に堪へなかつたのである。其の事は先にも既に言つた如く、三浦教授が其の講義中に指摘擧例せられた點も鮮くない。例へば、Men's house 即ち男子集會堂であるが、これは一切の女人の出入接近を禁忌せられた所であるのみならず、男子と雖も一定の加入禮 Initiation Ceremony を通過したものにあらざれば、自由に進入することの出來ぬ禁忌的場所、即ちタブード・ブレースなのであつて、其の内部に於ては老人が非常に尊敬せられた地位を保ち、子弟訓練上の大なる教權と部落の社會生活を規制する強盛な權威をもつて居るのであるが、これは多くの意味に於て、中國古代の學校たる辟雍又は泮宮に似たところがある。第一それ等は皆な嚴重なるタブード・ブレースなることで、辟雍は周圍が環狀に水濠がまわしてあり、中に方形な敷地があつて其處に殿堂が建てあり、四方に橋があつて出入に便してある。これが帝都にある天子の大學である。泮宮は上記の水濠が前面半分しかなく、且つ規模は前者に比し、少しく小さいもので、これは諸侯の建つる學校なのである。此れ等の學校には王・公・卿・大

其の頃の三浦新七博士と私

夫・士の子弟が入つて老教師より教を受けるのであるが、其れ等の子弟を國子と曰ひ、其の教育は極めて嚴格で、夏・楚と云ふ二種の鞭を用ひて教則を犯したのを鞭撻し、また老幼の間に秩序が嚴明であり、儀式祭典が重んぜられる等、原始的諸民族間に於けるメンズ・ハウス内に於ける青少年即ち春氣發動期 Puberty Age の加入禮 Initiation Ceremony を受ける候補生の教育的訓練と酷似して居り、其の教育的訓練には洒掃應待進退から言葉の使用法、進んで弓とか鎗とか其の他の武藝、種族や部落の傳説及び傳統的慣習又は智識技術の科目があり、歌謠音樂等から疾病瘡癩等に對する療法藥劑等に至るまで修得せしめ、更に呪文とか加持祈禱の如き幾多の祕密の法門迄も傳授するのであるが、其れには幾段かの階段があり、大體年齢の幼長によつて區切られて居り、年齢が長じて、相當に高い階段の加入禮を通過する迄は結婚が許されず、結婚が許されても夫婦の同棲は許されずに、男子集會所に寢泊りし、深夜又は早晨人知れず其所から妻の居る家庭に通はねばならぬ。安樂な家庭生活をなし得るのは多數階の加入禮を通過した長老連のみであると云ふ様な仕組になつて居るのであるが、此れ等の全部とは云はないが、其の内の幾多の事柄が中國古代の辟雍や泮宮又は庠と

か序とか云ふ學校の内に行はれる教育訓練に酷似して居る。中國古代の教育には禮樂射御書數の六科目を立て、之を六藝と言うたが、Men's House の教育も大體之に對應するものがある。而して最初の加入禮を通過した者には新たに名前即ち字ナメが付けられ、其の社會内に於て一人前の男兒として認められることになり、其れを證するに頭髪とか齒牙とか顔面又は身體の或る一定の部分に特徴が付けられ、又は一定の服裝とか帽子等を用ゝることを許されること恰も我が國古代の元服禮、又は中國古代の冠禮の如き意味があるのである。三浦教授は講義中屢此の Initiation Ceremony を冠禮と對比せられ、中國太古にも、或ひはメンズ・ハウスの如きものがあつたので、其の遺習が斯かる形で殘て居るのではなからうかとて、禮記の曲禮上に「禮に曰く、君子は其の孫を抱いて其の子を抱かず、此れは孫は以て王父の尸たる可く、子は以て父の尸たる可からざるを言ふなり」とあるを引き、メンズ・ハウスに於ては壯年男子は家庭から隔離せられ、妻と同棲を許されて居らぬから、自分の子と雖も抱いて愛撫する様なことは出来ない。長老となつて公然と婦人子供の棲居する家庭に安居し得るに至つて始めて幼児を抱いたりする機會があるのであるが、其の頃は自分の實子は大抵青壯

年となつてメンズ・ハウス生活をして居るので、膝下に居るのは孫であるから、其の孫を抱くのであると云ふ様な説明を其の講義でされたかに記憶せられる。此の説の當否は多少批評の餘地があるかも知れないが、斯かる觀察の仕方と云ふものは從來の所謂漢學者なるものが、未だ曾つて夢想だにしたことの無いもので、實に卓拔であると云はねばならず、斯かる考へから見て行くと禮記文王世子に天子「東序（學校）に於て先老を釋典す」とか「三老五更群老の席位を設く」と云ふやうなことがあり又祭統には「三老五更を大學に食ふ」と云ふ様なことがあつて、學校と「敬老」「養老」の事が相關聯して居るが、メンズ・ハウスも亦實に「敬老」を以て極めて重要事となし、且つ種々養老の方法も其のメンバーによつて講ぜられて居るので、酷似して居ると謂ひ得る。斯く考へると、其れから其れへと相似點が發見せられて來る。例へば禮記内則に「七年にして男女席を同うせず、食を共にせず」とあるなどは、男女の接近禁忌の風の遺習とも見られるものであり、斯かる類は曲禮にも「男女雜り座せず、襍柳を同うせず、巾櫛を同うせず、親しく授けず、嫂叔間を通せず」と云ふ如きことがあるが、これ等もメンズ・ハウスの加入禮に於ける修業中のメンバーに對する男女間の禁忌と

共通性を有する風習であり、「姑姉妹女子子己に嫁して反れば兄弟與に席を同うして座せず器を同うして食はず」とあるが、矢張りメンズ・ハウスのメンバーにも此の様なタブー的掟があつて、メンズ・ハウスに於て修業中の男子が道路を通行中に前方から女人（假令其が母であり姉妹等である場合でも）の來るに氣付いた場合は直ちに路傍の叢林中に隠匿して相會見するを避け、其の女人が遠く行き過ぐるを待つて始めて出で、通行しなければならぬ掟などがある。「親しく授けず、とは男から女へ、又は女から男へ物を引き渡すに當り、當方の手から直ちに先方の手へ渡してはならぬと云ふのであつて、一方の所持して居る物件を先づ他方の前に置き、當方の手を離れて然る後に受ける方が手を出して其の物件を取る可きであると云ふ意味であるが、メンズ・ハウスに居る男の子に其の母又は姉妹などが何か物件を持って行つてやる場合も、接近禁忌の外界迄行き、廻れ右をして其の子の居るメンズ・ハウスの方に背を向けて大聲で其の子の名を呼び、其の應答を聞くや其の子の顔をも見ずして、其の物件を地上に置いた儘逃れ歸らねばならぬと云ふ様な禁忌も行はれて居る。禮記の記する所と其の趣を共にするところあること知るべし。尙ほ禮記には敬老養老の種々なる禮制規定が掲

其の頃の三浦新七博士と私

げられて居るが、メンズ・ハウスは又實に老人連即ちエルダースが若年者から非常なる尊敬を受け、青少年者には許されざる諸種の滋味佳肴を食ふの特權を有して居り經濟的にも政治的にも大なる權勢を張つて居る。當に長老連のみならず、其のメンバーには年齢の多少によりて幾多の階序 Age classifications が設けられ其の年序によりて權威職分に差等が定められて居るが、禮記に於ても其の様なもの、又は其の遺俗ではないかと思はれるものが認められる。例へば曲禮上に「人生れて十年を幼と曰ふ、學ぶ、二十を弱と云ふ、冠す、三十を壯と曰ふ、室（妻）有り、四十を強と曰ふ、仕ふ、五十を艾と曰ふ、官政に服す、六十を耆と曰ふ、指使す、七十を老と曰ふ、傳ふ、八十九十を壽と曰ふ、七年を悼と曰ふ、悼と耄とは罪ありと雖も刑を加へず、百年を期と曰ふ、頤（養）ふ、大丈は七十にして致す、云々」とあるが、これである。當時私は臺灣蕃族習慣調査報告によつて所謂高砂族の間にも此の年序別制度の存することを知り、小論「臺灣蕃族の社會と經濟」（國民經濟雜誌第十九卷第三、四號）の中に聊か論及したことがあつた。

五

更に吾等の興味を感じたことは一にして足らない。即ちメンズ・ハウスを中心とする原始的民族の秘密講内に權勢を張つて居る最高長老は漸次に進化發展して部落の頭目首長から遂には君主の起原をなすと見らる可きものがあり、或ひは貴族諸侯の如き性格を有つに至るものがあり、其の講社の本據たるメンズ・ハウスは一方に於て傳統的な傳説又は歴史其の他の智識技術の傳習所であり、同時に祭祀儀禮の舉行式場と耆考敬老の機關とを伴つたものとなり、又は魔法的仲間組合のクラブの如きものと變遷して行つて、中國古代の辟雍泮宮の如き學校の性質を帯びるものとなつて來ることは、既に前に言及した通りである。而して其れ等の點は中國古代の禮、特に禮記の諸篇の中に少なからず其の遺俗と覺しきもの、又は痕跡にはあらずやと思はるるものを見出し得るかに感ぜられるのであつて、三浦教授が夙に其の様な點に着眼せられ、幾多の警拔な引例や事證を此れ等の虫喰本に採られたことは、私の驚嘆措く能はざりし所であつた。此の頃柳田國男氏を始め數名の吾國民俗學 Folklore の先覺者達が協力して雜誌「民俗」を發行し、また別に民俗叢書刊行を企てられたが、三浦新七教授も亦其の有力な同人であり、其の叢書の一冊として「禮記」に關するものを執筆する積

りであることを私に話されたことがあつたので、私は非常なる期待を以て其の著述出版を待望したのであつたが、豫告の同叢書は柳田氏のものを始め次ぎ次ぎと刊行せられたに拘らず、三浦教授の「禮記」に關するものは遂に公にせらるゝに至らなかつた。其の後（大正三年十月）私は長崎高商教授に任ぜられて赴任したので、右の著述を出されなかつた所以などを親しく承る機會も得られなかつたが、甚だ遺憾なことであつた。もつとも禮の學は中國の古典の學問の中に於て特に種々考勘考證上などにむづかしい問題に纏はれて居るものであり、就中禮記は最も衆訟紛然たる書とせられて居るのであるから、其の邊から或ひは自重せられたのでもあらうかとも考へて見るのであるが、然し其れは從來の舊弊漢學者的立場からのことで、三浦博士の如き泰西の最新の文化史的眼光乃至は人種學や、社會人類學、神話、傳説、古俗、舊慣等所謂 Folklore に互る豊富な智識の上より之を觀察研究せられてこそ、永く從來の學者によつては看破し玩味し得なかつた禮記の眞味妙光が始めて發揮せられるのではなかつたかと思はれるのであるが、遂に其の事あるに至らなかつた事は眞に痛惜に堪へない所である。然しながら今より四十餘年も以前に於て從來何人も心付かなかつた（吾等の知

る限りに於て)斯くの如き見方を以て禮記などを取扱ふと云ふことは、實に破天荒の卓見であつたと嘆稱するに足ることであると思はれる。

私が三浦博士を訪問して教を請うた時に、指示紹介せられた今一つの書たるフレーザー先生の *Potemism and Exogamy* に關聯して茲に一言付加へることを許されたい。お恥かしいことながらフレーザー先生の如き碩學の名を私は其時迄全然知らずトーテミズムなどのことも三浦博士の講義より外には未だ聞かなかつたのである。尙ほフレーザー先生にはダルウィンやスペンサーが十九世紀の學界にたてた學勳に比すべき程の大業績であるとタイムズ紙が稱贊した *Golden Bough* と云ふ大著のあることも此の時始めて知つたのである。尤も當時の吾國に於てはフレーザーの名を知り、其の著書を読むやうな學者は甚だ少範圍に限られて居たのかも知れず其の頃迄に *Golden Bough* を吾が學界に紹介したのは僅かに上田敏博士くらひなものに過ぎなかつたらしいのであり、私が同書を入手したのも長崎高商へ赴任して後のことであるが、*Totemism and Exogamy* の方は其の時(大正二年頃)三浦教授からトーテムの起源について

其の頃の三浦新七博士と私

て論じてある其の第四卷を暫時拜借して中國古代の神話傳説等と比較研究し、當時(大正二年乃至四年頃)の國民經濟雜誌や日本社會學院年報等に發表して、先進の教を乞うたことがあつた。「トーテミズムの起原及び支那太古に於ける此制度の存否」(日本社會學院年報第二、第三合冊、大正四年四月)などは其の一つであり、又 *Exogamy* に就ても漢民族の社會史上極めて顯著な特徴とせられ、同姓不娶の慣習の如きは正に其の好適例であるので、私の中國古代の社會史經濟史の研究上に於て參考に資した所決して少くはなかつた。

六

今一つ私が長崎赴任以前に三浦博士から享けたところの學習上の利益は、圖書館の目錄改修の事業に手傳つた事からである。此の事は尙に私一個人として大利益を得たるのみならず、爾來此の圖書館を使用した母校の教授學生は一般に廣く深く且つ永く置く可からざる便益を享得したものと云はねばならぬのであつて、三浦博士が母校の爲めにせられた功績の一大部分をなすものと云ひ得るであらう。三浦博士が母校の圖書館長を兼任せられたのは大正元年の秋であつたか或ひは翌二年の春

であつたかはつきり記憶はせぬが、兎に角其の任に就かれるや、敢然として目錄カードの改善を企てられた。斯かる煩累な事務的の仕事などは多くは事務員まかせに流れ易いものであるが、三浦博士の意氣込はその様な生硬しいものではなかつた。私は明治四十三年以來母校の講師囑託の下に關博士主幹の調査部の仕事や其のゼミナールの助手及び専攻部自由圖書室の事務などをして居たのであるが、三浦圖書館長は、其の企てられたカード目錄の改善事業に親ら携はると共に私にも其の手傳を命ぜられた。現在の東京商大の教授諸氏の中にも一つ橋の舊校舎の後にあつたあの狹隘な當時の圖書館の事を記憶して居らるる人は極めて稀であらう。印刷目錄もカード目錄も、今日のものから見れば頗る幼稚で不備のものであつたが、爲めに、圖書館利用者にとつて多大の不便があつたことは云ふ迄もないことであるが、然しそれならばとて如何に之を改善するかと云ふ様な案などは學究的な教授諸先生などの念頭に浮び難いのを常とするのみならず、目錄を書き直すとカード改善の仕事に當るなどの如き一見乾燥無味にして煩累限りなやうな事務的の仕事などを好まぬのが、其れ等の人々の一般の傾向と云つてよからう。然しながら眞に學問を盛にせんと欲するならば、教師たる

者が、よき書物を便利に讀んで、よき講義をしなければならず、同時に學生にもよき書物を便利に讀み得る様な仕組を提供しなければならぬ。此の意味からすれば、目錄カードの改善と云ふ事は學問隆昌向上の重要な根本策の一つであつて、一と度之を技術的機械的に改善して置けば、其の利益は爾後將來に向つて莫大なるもののあることは論ずる迄もないことである。三浦館長が敢然として此の事を企てられたのは蓋し此の點に見る所があつたに相違ないのである。三浦博士は目錄カードを全部其の形式及び記載項目共に所謂スタンダード・カードの様式にやり直すことに決意せられ、其の出勤の日には必ず幾時間かづゝ親ら書庫内の圖書を取り出して來て其の事に當られた。私も毎日其の事に従つた。幾萬冊と云ふ塵埃だけの圖書を順次に一冊残らず取り出して來て、著者名、書名、發行場所、其の第一版の年次、該書の版數其の年次、書物の大きさ、序文、目次、本文、索引等の各別頁數、其の書の屬する主要分類、及び關涉分類……等で随分詳細に互つたものであり、なかなか煩累ではあるが、其の代り此のカードが完成すれば、使用者にとつては便利此の上もないものであつた。現在國立の商大圖書館に存するものは必ずや此の時に改善せられた標準式によつたカードであら

う。私は約一ヶ年程も斯かる仕事に従事した。毎日手掌も襟袖も埃だらけになり、鼻の孔までも黒くなり恰も煤拂の工夫の如くなるを免れなかつた。讀者の中には或ひはそんな汚たい面倒な仕事をよくも一ヶ年間もやつたものだと此の田崎に對して憐憫の情を催すものもあるかも知れない。全く其れはもつともなことである。最初此の仕事を命ぜられた時にはさすがに忍耐強さを誇とする越後人の私も實は相當うんざりしたものである。併し一二週間やつて居る中に知らず識らず其の面倒臭さや煩雜さを忘れて行つた。私は毎日毎日自分の圖書文獻に關する知識の伸びゆき擴まり行くことを覺えた。自分は曾つて劍道の師範山田次郎吉先生のお宅を訪問して其の藏書の多きを見て垂涎し、因つて山鹿素行先生の學問を窺ふの端緒を得た。又海禪寺寄寓中は同寺の先住敬冲大和尚の涉獵せられた佛典漢籍の多大なのを見て一驚を喫し、其れを自由に讀むことを許されて獨學ながら聊かなりとも其の方面の知識を獲得するを得た。然るに、今度は其れ等と比較にもならぬ程豊富な母校圖書館の圖書全部を自由に取り出して見ることが出来るのである。其の總部数が幾萬であつたか今記憶して居らぬが、少くも十萬を前後するものであつたであらう。其れを毎日何十冊、又は百冊以上

其の頃の三浦新七博士と私

も手に取つて仔細に上記の標準に依つて其の内容を検索し記録するのである。日に日に未見の書を見、未知の智に觸れるのである。日によつては何十枚のカード書入を次々と書き込んで大に進捗することもあつたが、時により珍異又は渴望の書に出會するときは思はず讀み入りて時の過ぐるを覺へざることもある。斯くの如くして私は三ヶ月半年と經つにつれ、如何なる問題に關聯しては如何なる文獻が此の圖書館にあると云ふことを知り、又單なる閲覧者として印刷目錄なりカード目錄なりを検索する場合には著者名や書名の上からは一見どんな内容の本かわからなかつたり、又は自分の研究せんとする問題に對してそれ程須要な書ではなからうと速断したりするやうな本が案外に貴重必須の内容を有する如きことを發見したりして、斯かる仕事に携はらずには恐らくは到底得難かつたであらう智見を弘むることが出来た。同時にそんなに澤山あらうとは想像もしたかつた程に多數の且つ精撰せられた漢籍の備へられて居ることを知つて驚き且つ喜んだ。聞いて見るとこれは吾等が曾て商業史や商業作文などを教はつた文學博士横井時冬先生が圖書館に關係して居られた時代に購入せられたものが過半を占めて居ると云ふことであつた。良い學者は黙々として居ながらも何時とは

なしに良き仕事をして居るものだと云ふことをつくづく感心せざるを得なかつた。三浦博士も館長としてど七どし良書善本の購入をされたが、特に古今圖書集成とか、四部叢刊とか云ふ様な一部千冊以上もあると云ふ様なもの、冊府元龜とか、金石索とか云ふ容易には手に入らない貴重書、殷虛書契であるとか、マックス・ミュラーのサクレツド・ブックス・オブ・ゼイエスタだの、レグのチャイニーズ・クラシックスなどの名著は皆此の時に備へられたものである。且つ從來吾等の未だ見たことのない世界各國大都市の古本屋の在庫目録が次第に郵送せられて来た。ケガンバウルだのプロブスト・ハインなどの如き世界一流の古本屋の在庫品目録を私が見て刮目し、羨望したりするに至つたのは此の頃以來のことであり、又本郷の文求堂の目録にも親しくなり、果ては文求堂の主人田中慶太郎氏（外語出身の畏敬すべき人であつた）とも顔見識となり交友する様にもなつた。思へば是れ皆三浦博士によりて圖書館の目録カード改善の仕事の手傳をさせられたことから得られた賜物に外ならぬ。私は大正三年十月に長崎へ赴任したのであるから、其れは僅かに一ヶ年そこそこの間の事であるが、私の學問的生涯に如何に大きい利益を加へたか知れないのであつて、常々其の學恩

を偲んで感謝して居るのである。

七

私は大正五年十一月文部省から留學を命ぜられ長崎高商から米國に渡り、最初ハーバード大學に半年程居つてタウシグ教授の國際貿易論就中 Comparative Cost of Production の理論や、Gask 教授の米國經濟史などを聴講したが、東京商大の高垣寅次郎、名古屋高商の高嶋佐一郎、東大の高柳賢三等の諸教授や、海軍の武井大助主計大尉等が皆なハーバードにあり、尙ほ九大の河村幹雄、森兵吾、京大の厨川白村等の諸教授なども暫時滞在して居り、又基督教で留學せる柳原貞太郎君あり、その他にも私立大學や日本銀行、陸海軍等の留學生等が來ると云ふ風で一時期頗る賑やかであつたが、私の茲に一筆是非書き加へて置かねばならぬと思ふのは、自費で來て既に十年以上も留學して居ると云ふ移川子之藏博士である。同君は會津の産だと聞いたが、直ちに野口英世博士を聯想せしむる如き篤實なる勤勉家で、夢も英語で見るが會津に留守居して居られる母堂までが夢の中では英語で話されるなど語られる程に、米國に居馴れた人で先輩留學生として種々なる世話を下さつたが、同氏

の専攻は Social Anthropology 又は Ethnology の方面に屬する。亞米利加印甸族の如き原始的民族の文化に關する研究をやつて居り、大正六年の春頃は丁度其のドクトル論文を脱稿し、間もなく其が通過して芽出度ドクトルのデグリーを得て歸朝せられたが、私が三浦博士の影響によりてメンズ・ハウスやトーマやタプーなどの研究に聊かながら頭をつつこんで居り、先きに記した如く H. Webster の Primitive Secret Society を翻譯したことなどから亞米利加印甸族に關する多少の智識を有して居たことが縁となつてゆくりなくも移川氏と學的交りを結ぶこととなり、ハーバード大學の直く近くにある有名なる人種學博物館たる Peabody Museum 内に於て移川氏の受けて居られた研究席の特權を譲り受けることが出來て研究上に多大の便益を得たのであつた。此の特權は或る規定の下に希望者の申込によりて許與せられるもので博物館内の一定の場所の研究用の卓と椅子を常用し、且つ自由に館内の研究資料を利用するを得るのであるが、數に制限があつて空席が生じなければ、申込んでも容易に受けられないものであつたが、私は恰もよく移川氏の後釜に座るを得た譯である。茲に私は American Ethnology や Folk-Lore に就て短時日の間に比較的多くの實際的智見を

其の頃の三浦新七博士と私

續むることが出來た。且つ時の吾が臺灣總督府民政長官たる下村宏博士と Peabody Museum との間に斡旋して同館の諸報告と臺灣蕃族舊慣調查會報告との交換寄贈を取り計らひ、且つ同館内から下村長官に卑見を書送りて臺北帝大に於て人種學講座の極めて重要なこと並びに高砂族を主要とする人種學博物館を開設すべきことを進言したりしことがあるが、其の手紙は同地の新聞に掲載せられたと云ふことであつた。後日博物館とは行かぬ迄も蕃族土俗陳列館様のものが出來、更に移川子之藏博士が臺北帝大の教授となられ其の人種學講座を擔當せられることになつたことなどは不思議な因縁と云はねばならぬ。

八

私は大正六年夏ニューヨークに行き其の秋から翌年の冬迄ワシントンに滞在し、十二月シカゴ大學に行き次いでパークレーのキヤリホルニヤ大學を訪うて大正八年二月歸朝したが、此の間ニューヨークの Metropolitan Museum マンハッタン New National Museum シカゴの Field Natural History Museum 等に於て亞米利加印甸族の生活に即する人種學やフォルクローアの方面などにつき實物研究をなし、ワシントンに於ては

National Museum の人種學部長 Holmes 博士、Hertricka 博士等に教を乞ひ、又有名な Smithsonian Institution を訪問し、且同所内の Bureau of American Ethnology から出版せられた Annual Report や Bulletin 及び Lewis Morgan; System of Consanguinity and Affinity of the Human Family, Washington, 1871. などの貴重なるものを少なからず入手することを得、シカゴに於ては Starr 博士や Laffer 博士を訪問し、享益し又古本屋と Henry R. Schoolcraft; Ethnographical Researches. Respecting the Red Man of America, 6 volumes, Washington, 1852-60 を發見することを得た。此の本は既に坊間に於ては滅多に得られない希觀書で、ニューヨークでもワシントンでも、遂に得られなかつた垂涎の書であつたので非常に嬉しかつたが、頗る高價なので手が出せず其の本屋に懇談し自分が日本に歸つてから必ず購入するからと手付金を置いて堅き約束をなし、歸朝後三浦博士と相談して母校の圖書館に買つて頂き更に之を長崎高商の圖書館に借受けて使用させてもらつたこともあつた。之は無論東京商大圖書館に藏せられて居る筈であるが、實に斯學界の寶と云ふてもよんであらう。要するに Ethnology や Folk-Lore の學問に

私を結び付けて下さつた縁結びの神様は三浦博士であつた。

其の後私は昭和四年春迄長崎高商教授に在職し更に大阪商大教授に轉任し昭和十五年停年迄在職し、つと東京を離れて居た爲めに三浦博士に接する機會は稀であつたが、昭和五年私が英國に行き益々フレージャー先生の學問に傾倒したり、ウェスターマークやセリグマン、又はマリノウスキー諸博士の講義を聞いたり、一層關心を深めたりしたこと、遠因は皆これ三浦新七博士から受けた大きな影響の結果であつたと思つて胸中終始感謝の念に満ちて居る次第である。今次の戦争中私が學用で上京した際、三浦博士と偶然に會ひ全く鶴の如き白髮の老紳士たる博士と暫時談話したが、切迫せる時局下で緩々學問上の事を語り合ふやうな閑もなく、常に私の胸中にある其の學恩に對する感謝の言葉すら充分に述べるにも至らずして別れたが、意外にも其れが三浦博士に會つた最後の機會とならうとは、實に人生のはかなさを痛感せざるを得ない。同博士は著述論文等には特に慎重の態度を持して居られ、餘り多くを發表はせられなかつた様ではあるが、公にせられたものは皆博大な智見深遠な造詣に基いた獨創的のものであつた。同博士の追悼とか記念とか云ふ様な事業が企てられる場合には同博士の論文集刊行の一事を

是非其の一つに加へられんことは私の切望に堪へざる所である。本稿の初頭に述べたやうに明治の末葉頃柳田國男氏等が民俗叢書を刊行せられた時に三浦博士が執筆の豫定であつた「禮記に關する民俗學的研究」(書名にあらざ、書名は未定であつたと思ふ)とも云ふ可きものが遂に公にせられずじまひになつて居ることは私共として甚だ遺憾に堪へぬ事に思ふのであるが、必ずや着手せられて居つたことを想像するのであるが、其の様な遺稿がありはせぬであらうか。同博士のゼミナールを受けられた門下生の方々で其のやうな心當りのあらるゝ方がないであらうか。勿論御本人の發表せられなかつた未定稿の様なものなれば充分慎重に取扱ひ、故人の意志に悖らぬやうに心を用ひなければならぬけれども、三浦博士の如き見方により「禮記」の研究と云ふものが世に公にせられたならば必ずや東洋學界に未だ曾て見られなかつた一つの新しき光明を映射することであらうと思はれるのである。博士が豫定の發表をせられなかつたと云ふことについて私は爾來四十餘年後の今日尙ほ残念さを感じざるを禁ずる能はざるものである。實は私も三浦博士によつて開いてもらつた「禮記」などの見方、其の學問的取扱ひ方を微力及ぶ能はざるながらも、努めて活用して幾分の研究を進めて

其の頃の三浦新七博士と私

來ては居る積りであるが、曾て自ら期したところの十分の一をも遂げ得ずして既に七十歳の齡に達した今日から過ぎ去つた久しい歲月を顧みて自ら慚然たらざるを得ぬものがある。

(昭和廿四年三月三日)